

# 清水文選學發微

——『新文選學』を中心に——

海村 惟一

はじめに

清水凱夫氏の『文選』研究を假に「清水文選學」と言うことにしたい。そこで、先ず思い出されるのが清水氏が提唱し、自ら實踐を重ねることによつて確立しようとする「新文選學」という新しい學術専門用語であろう<sup>①</sup>。拙文が敢えて「清水文選學發微」をタイトルとして、その研究の概括を氏の『新文選學——『文選』の新研究』（一九九九年、研文出版）という巨著に絞つて行おうとするのは、「清水文選學」が現代日中學術交流、或いは學術論争を通して、より成熟してきたと考えたからである<sup>②</sup>。

『新文選學』は、著者が一九七六年から二十三年の歳月をかけて、文選學に心血を注いで打ち込み、さらに、一九八八年から中國の學者と「新文選學」についての議論を展開しながら仕上げてきた彼の文選學の集大成である。今、参考までに、『新文選學』の總目を紹介すると次のようである。

- 序 章 「新文選學」の創建
- 第一章 『文選』全體像の概観
- 一 収録作品の統計による『文選』の全體像把握の必要性
  - 二 全収録作品の統計による分析
  - 三 各王朝の存続年數及び遺存作品數と採録作品との關係
  - 四 収録作品の分野別統計による分析
  - 五 全文體作品の作家別統計による分析

## 第二章

- 一 『文選』編纂の實態
  - A 全文體による分析
  - B 賦の分野による分析
  - C 詩の分野による分析
  - D 文の分野による分析
- 二 從來の『文選』編纂實態の究明情況
- 三 六朝の「總集」(詩文集) 編纂の實態
- 四 梁代の「總集」(詩文集) 編纂の實態

序 梁代の「總集」(詩文集) 編纂實態の究明の必要性

- (一) 梁元帝蕭繹編纂の「總集」(詩文集)
- (二) 梁簡文帝蕭綱編纂の「總集」(詩文集)
- (三) 梁代のその他の「總集」(詩文集)
- 四 昭明太子の「總集」(詩文集) 編纂實態

- (一) 「古今詩苑英華十九卷」の編纂實態
  - (二) 『梁書』に見られる昭明太子の性格と生活實態
  - (三) 梁簡文帝・元帝の文才と「總集」編纂の關係
  - (四) 王侯・太子の文學集團と文學觀の形成
  - (五) 『文選』編纂時における昭明太子集團の情況
  - (六) 『文選』編纂時における昭明太子の情況
  - (七) 『文選』編纂の時期
- 第三章 『文選』の實質的撰者
- 一 傳統的文選學の實質的撰者に關する見解
  - 二 『文選』の實質的編者特定の必要性和方法
  - 三 収録作品の内容分析による『文選』の實質的編者の究明
    - (一) 任昉「劉先生夫人墓誌」採録の事情
    - (二) 劉孝標「重答劉秣陵沼書」・「辨命論」・「廣絶交論」採録の

## 事情

A 「重答劉秣陵沼書」採録の事情

B 「辨命論」採録の事情

C 「廣絶交論」採録の事情

(三) 梁代の碑文の選録事情

A 「頭陀寺碑文」の選録事情

B 「齊故安陸昭碑文」の選録事情

(四) 徐悱「古意酬到長史漑登琅邪城」の選録事情

(五) 何遜詩不入選の事情

(六) 『文選』「賦」中における「情」の諸作品選録の事情

『文選』編纂の動機と選録基準

『文選』編纂の動機と目的

『文選』編纂基準

## 第四章

## 一

(一) 昭明太子の文章観を中心とした従来の『文選』編纂基準

(二) 昭明太子集團の「總集」編纂の中核的存在——劉孝綽

(三) 『文選』の選録基準としての「宋書謝靈運傳論」

## 三

(一) 『文選』收録作品に内在する文學観

(二) 『文選』收録の「頌」の檢討

A 王褒「聖主得賢臣頌」

B 史岑「出師頌」

C 劉伶「酒德頌」

D 陸機「漢高祖功臣頌」

(三) 『文選』收録の「上書」の檢討

A 鄒陽「獄中上書自明」

B 江淹「詣建平王上書」

## 四

(一) 昭明太子「文選序」の檢討

(二) 「文選序」の位相と意義

(三) 「事出於沈思、義歸乎翰藻」に對する阮元の解釋

(四) 「事・義」に對する諸種の解釋

(五) 「沈思」・「翰藻」に對する先人の解釋

(六) 「沈思」・「翰藻」の函義

## 第五章

『文選』の他書との影響關係及び受容・變遷史

一 序 他書との影響關係及び受容・變遷史究明の必要性

(一) 『文選』と『文心彫龍』との關係——韻文に關する檢討

(二) 兩書の影響に關する從來の説について

(三) 兩書の創作・編纂の動機と目的

(四) 兩書の基本的文學観の相異

(五) 「明詩」篇との比較檢討——西晉詩を中心として——

(六) 「明詩」篇との比較檢討——兩漢・魏詩を中心として——

(七) 「樂府」・「詮賦」・「頌讚」篇との比較檢討

(八) 「銘箴」・「誄碑」・「哀弔」篇との比較檢討

## 二

(一) 『文選』と『文心彫龍』との關係——散文に關する檢討

(二) 「論說」篇との比較檢討

(三) 「詔策」篇との比較檢討

(四) 「檄移」・「封禪」篇との比較檢討

(五) 「章奏」篇との比較檢討

(六) 「奏啓」篇との比較檢討

(七) 「議對」篇との比較檢討

(八) 「書記」篇との比較檢討

## 三

王羲之「蘭亭序」不入選問題の檢討

(一) 歴來の「不入選」理由

(二) 近年の「蘭亭序」の「不入選」理由

(三) 「蘭亭序」と「臨河序」の問題

(四) 「世說新語」劉孝標注の性質

(五) 『文選』の編者と劉孝標との關係

(六) 王羲之「蘭亭序」不入選の理由

## 第六章

「新文選學」の課題と方法

一 「新文選學」の現狀

二 顧農論文への反論——(1) 「頭陀寺碑文」・「廣絶交論」等に關して——

三 顧農論文への反論——(2) 「頌」・「上書」等に關して——

四 顧農論文への反論——(3) 宋玉「高唐賦」・「神女賦」等に關して——

五 「新文選學」の課題と方法

## A 「新文選學」の第一の課題

- (1) 齊・梁代における總集編纂の具體的情況問題
- (2) 『文選』編纂時期の特定問題
- (3) 『文選』編者の特定問題
- (4) 編者の文學觀・境遇・性向に關する問題
- (5) 「文選序」の基本思想及び撰者問題
- (6) 『文選』收録作品が示す内在律問題
- (7) 『文選』編纂の目的と選録基準問題

## B 「新文選學」の第二の課題

- (1) 『文心彫龍』との影響關係
- (2) 『詩品』との影響關係
- (3) 「宋書謝靈運傳論」(『四聲譜』・「沈約の八病」)との影響關係
- (4) 陸機「文賦」・摯虞「文章流別論」・李充「翰林論」・裴子野「彫蟲論」・蕭子顯「南齊書文學傳論」などとの影響關係

## C 「新文選學」の第三の課題

- (1) 各時代・各人の『文選』に對する批評・評價の樣態を調査分析する問題
- (2) 從來の注釋(李善注・五臣注など)に對する再檢討
- (3) 各國・各時代における『文選』研究書の檢討

## D 「新文選學」の第四の課題

- 一 沈約「八病」眞偽考
- 二 沈約聲律論考―平頭・上尾・蜂腰・鶴膝の檢討―
- 三 沈約韻紐四病考―大韻・小韻・傍紐・正紐の檢討―

## 第七章

『文選』研究の基礎資料―沈約の聲律諧和論―

以上の總目を概觀すると、「清水文選學」の中核は「新文選學」にあることが明々白々である。さらに、「清水文選學」が中國の學者と論争しながら成熟したことや、「新文選學」の課題と方法がより一層鮮明になってきたこともはっきりと讀み取れる。

## 一、「新文選學」という學術専門用語について

「新文選學」を新しい學術専門用語として、最初に廣く中國に紹介したのは一九八八年に刊行された『首届昭明文選國際學術討論會 昭明文選論文集』所收の韓基國氏の『日本「新文選學」管窺』という論文である。韓氏はその論文において、「清水文選學」を日本の「新文選學」とし、その内容を「1. 『文選』的編者、2. 『文選』的選録標準、3. 『文選』與『文心彫龍』及『詩品』的相互關係、4. 沈約聲律論、5. 簡文帝蕭綱『與湘東王書』、6. 對『文選』的評價」に集約された。

しかしながら、この韓氏が集約された「清水文選學」の内容に對して、許逸民氏は同じ一九八八年「首届昭明文選國際學術討論會」で「談『選學』研究的新課題」を發表したが、反應を示さなかつた。その原因は恐らく『首届昭明文選國際學術討論會 昭明文選論文集』という論文集がその學術討論會の開催より二ヶ月早く刊行されたため、事前に許氏が『日本「新文選學」管窺』という論文を知らなかつたからだろう。

ところが、同じ一九八八年に清水氏の「文選編纂の周邊」及び「『文選』中の梁代作品撰録について」という「新文選學」の代表作が漢譯出版され、前者は中國の大學紀要(『喀什師範學院學報』)に收録され、後者は學術書である『首届昭明文選國際學術討論會 昭明文選論文集』に收録され、これによつて、「新文選學」と呼ばれる「清水文選學」が、正式に中國の文選學界に登場したのである。その後、これらに續いて清水氏の論文が次々と中國の各大學の紀要に漢譯掲載され、反響を呼んだ。早くもその翌年の五月に、一九八七年までの「清水文選學」の代表作が集成して漢譯され、重慶出版社より『六朝文學論文集』(一九八九年)という學術書として中國本土で出版された。「清水文選學」の旋風<sup>⑧</sup>が一九八九年に始めて中國に上陸したのである。

その「清水文選學」の旋風が大陸に上陸してから、三年後の一九九二年の第二屆昭明文選國際學術討論會で、許氏は「再談『選學』研究的新課題」（一九九二年）という論文で、韓氏が集約された「清水文選學」の内容を踏まえ、次のように指摘している。

不過我在這裏呼創建的『新選學（新文選學）』，其研究範圍要比清水凱夫先生更廣大，涉及的問題更多，而且與所謂『基礎研究』又是連結爲一體的。

清水氏が創建實踐したこの「新文選學」を受けて、許氏も「新文選學」の創建を中國學界に呼び掛け、それと同時に、清水氏が提唱した「新文選學」の内容を「1. 『文選』版本研究，2. 『文選』學史，3. 『選學』史料學，4. 『文選集注』研究，5. 『選學大辭典』に歸納した。一方、屈守元氏などが反論を行った。特に顧農氏は清水氏の同意を得て、「清水文選學」への反論を打ち出し、「與清水凱夫先生論『文選』編者問題」という論文が『齊魯學刊』（一九九三年、第一期）より公刊され、清水氏の「劉孝綽主導說」を否定した。

顧農氏の反論を受けて、清水氏はその反「反論」としての「顧農氏の反論に答え、併せて『新文選學』の課題と方法を論ず」という論文が、『立命館文學』（一九九四年、第五三七號）より發表され、さらにこの論文を含め、一九九〇年以後の「清水文選學」の代表作を結集して漢譯し、首都師範大學出版社より『清水凱夫『詩品』『文選』論文集』（一九九五年三月）が中國本土で出版された。

かくして「清水文選學」の旋風が、再度中國に上陸した。それより五ヶ月後、『清水凱夫『詩品』『文選』論文集』に對して、許逸民氏は一九九五年八月、鄭州大學で開催された第三屆昭明文選國際學術討論會で

「『新選學』界說」という論文を發表し、「清水文選學」について、次のように評價をしている。

今年五月間、承清水凱夫教授惠寄近作『清水凱夫『詩品』『文選』論文集』（首都師範大學出版社、1995年3月），先睹爲快。其中『答顧農先生併論『新文選學』的課題與方法』一文，再倡『新文選學』之說，立論較『六朝文學論文集』（重慶出版社1989年版）猶爲全面和縝密。

學術論争を通じて、「新文選學」という學術概念の認知度もより一層高くなり、「清水文選學」もより一層中國に知られた。その結晶としては、『六朝文學論文集』より『清水凱夫『詩品』『文選』論文集』のほうが「猶爲全面和縝密」であると許氏からの高い評價を得たのである。

さらに、許氏の論文は、引き続き、清水氏の「四大課題」を次のようにまとめて取り上げている。

一、「『新文選學』の第一課題，無論如何也是傳統『選學』完全缺乏的『文選』真相的探明。」概括爲七個問題：（1）「齊梁時代總集編纂的具體情況。」（2）「『文選』編纂時期的特定問題。」（3）「『文選』編者的特定問題。」（4）「有關編者的文學觀、境遇、性向問題。」（5）「『文選序』的基本思想與撰者問題。」（6）「『文選』收錄作品顯示的內在規律問題。」（7）「『文選』編纂的目的和選錄基準問題。」

二、「第二個課題，是弄清如下的先行理論對『文選』的影響關係。」概括爲四個問題：（1）「與『文心雕龍』的影響關係。」（2）「與『詩品』的影響關係。」（3）「與『宋書謝靈運傳論』（『四聲譜』、『沈約的八病』）的影響關係。」（4）「與陸機『文賦』、摯虞『文章流別論』、李充『翰林論』、裴子野『雕蟲論』、蕭子顯『南齊書文學傳論』等的影

響關係。」

三、「第三重大課題，是弄清各個時代對『文選』接受、評價的變遷。換言之，即擴充和充實歷來所說的『文選學史』。」概括爲三個問題：

(1)「調查分析各時代、不同的人對『文選』的批評、評價情況。」  
(2)「對歷代注釋(李注、五臣注等)的再檢討。」(3)「各國、各時代的『文選』研究著作的研討。」

四、「第四個課題，是使傳統『選學』已進行的工作變得更加充實。那就是徹底地探討版本、訓詁學的歷史，補上欠缺的部分。」

以上のように概括した上で、「前面引述的『四大課題』說，顯然比韓(基國)先生的總結要寬泛得多了。這說明日本對於『新文選學』研究範圍的認識，也是不斷發展變化」と、積極的に清水氏の「新文選學」を評價した。

このような學術交流を通して、許逸民氏の中國學界における「新文選學」の内容に關する提案も次第に成熟して行つたように思われる。

許氏は「『新選學』界說」で中國學者の『新選學(新文選學)』に關する諸説を集約しながら、「新文選學」の内容を次のように集約した。

1. 『文選』注釋學
2. 『文選』校勘學
3. 『文選』評論學
4. 『文選』索引學
5. 『文選』版本學
6. 『文選』文獻學
7. 『文選』編纂學
8. 『文選』文藝學

許氏は中國學界の「新文選學」を全部「學」に集約した上で、提唱した。この中國學界の「新文選學」の八學は、同氏の三年前の第二屆昭明文選國際學術討論會で發表した「再談『選學』研究的新課題」(一九九二年)という論文で提唱した以下の「新文選學」の五つの内容：

1. 『文選』版本研究
2. 『文選』學史
3. 「選學」史料學
4. 『文選集注』研究
5. 「選學大辭典」

と比べると、より成熟してきたと評してよからう。言い換えれば、假に「清水文選學」の旋風が一九八九年に中國に上陸、そして、第二陣の旋風が一九九五年に上陸しなければ、はつきりとした「新文選學」という學術専門用語もなかつたし、『文選』の撰者問題をめぐる學術論争もなかつたと思われる。

## 二、「清水文選學」の課題と方法について

『新文選學—『文選』の新研究』に示した「清水文選學」の課題は、一言で言えば「詞華集としての『文選』全體像の總合的究明」を行うことである。これを實現するために、「清水文選學」は、積み重ねの實踐と並々ならぬ思索によつて、新しい研究方法を生み出したと言えるだろう。

「清水文選學」のこの研究方法は、以上に掲げた『新文選學—『文選』の新研究』の總目の第一章「『文選』全體像の概観」を見れば、すぐ分かるようにそれが統計分析法であり、清水氏の言葉で表現すると「宏觀的」

手法というものである。さらに、第二章から第五章の目次を見れば、それが逐一考證法であることも容易に理解できる。清水氏の言葉で表現すると「微觀的」手法である。この二つの研究方法について、清水氏自身は次のように関連させ、實踐し、實用化してきたのである。

先ず「宏觀的」手法で『文選』収録作品の内容を分析検討し、そこに存在する選錄基準や傾向性を大まかに把握する。その後、更に「微觀的」手法により逐一「撰者の特定」や各文體ごとの「選錄基準の究明」等といった諸問題の詳細な検討を實施する。そして、そこで得られた各結論を有機的に関連づけ、全體的、總合的に考察する。これら一連の究明を通じてこそ、はじめて『文選』の全體像を解明し得るのである。この方法が現在のところ最も有効で正常な『文選』實像の究明法であると考えられる。

實のところ、「清水文選學」の「微觀的」手法には、傳統的な版本學・訓詁學・文選史學に新しい光りを當てて、『文選』實像の究明に役立てることがあつたと思われる。

要するに、筆者なりに纏めて説明すれば、「清水文選學」の「宏觀的」な統計分析法と「微觀的」考證歸納法とを有機的に関連づけ、全體的、總合的に考察するという新しい研究法は、單に『文選』學の新しい研究法だけではなく、人文科學全般にとつても、新しい研究法ではないかと思ふのである。

### 三、「清水文選學」の本質的な問題について

「一九九九年」という年は、日本『文選』學研究史上の記念すべき年

である。その年に二十世紀の日本『文選』學を締め括った雙壁が公刊された。先ず、一九九九年四月二十八日に岩波書店より日本學界の重鎮である岡村繁博士の『文選の研究』が公刊され、この日本『文選』學の巨作は、作者が五十年をかけて、渾身精力を注いだ日本の傳統『文選』學を更新しながらも、日本の新しい『文選』學を引っ張っていく時代の巨作であり、その三年後、『岡村繁全集』（全十卷、上海古籍出版社）の第二卷『文選之研究』として漢譯された。そして、一九九九年十月一日に研文出版より日本學界の中堅である清水凱夫氏の『新文選學——『文選』の新研究』が公刊された。本書は、著者が二十三年をかけて、學問の魂を打ち込みながら、日本『文選』學の新しい道を開いた時代の巨作であると言えるだろう。

「清水文選學」の本質的な問題について、岡村繁博士は『文選の研究』で次のように述べている。

さらに最近に至り、この『文選』の編者問題をめぐって、わが國の學界から新しい學説が興つてきた。これは、従來のように古記録だけからではなく、『文選』そのものに収録された作者や作品をも詳しく検討することによって、従來の蕭統說ないし蕭統主導説をくつがえし、新たに劉孝綽主導説を提唱するものであつて、一九七六年以來、清水凱夫が陸續として發表した關係論文によって、はなばなしくその幕が切つて落とされた（その注には、「これら清水凱夫の一連の『文選』關係論文は、最初『立命館文學』『學林』等に發表されたが、後に一括して、一九八九年五月、中國の重慶出版社より『六朝文學論文集』として華譯公刊され、また一九九五年三月、首都師範大學出版社より『清水凱夫『詩品』『文選』論文集』として華譯出版された。」）。現在、この學説は、日中兩國の學界で「新文選學」と呼稱せられ、熱つぱく賛否兩

論が火花を散らしている。本書の第一章『文選』編纂の事態と編纂当初の『文選』評価は、これら一連の清水論文におおむね賛同しつつ、『文選』が出現した黎明期前後の文壇の實情について、いささか私なりの研究結果を開陳した考證學的新考である。

岡村繁博士は清水氏が提唱した「劉孝綽主導説」におおむね賛同しつつ、さらに、「開陳した考證學的新考」は「とにかく『文選』は、もともと『詩苑英華』のように莫大な作品群の中から直接秀作品を選び挙げた第一次的選集ではなく、そうした第一次的選集に全面的に寄り掛かって、劉孝綽が病身の昭明太子の閲讀賞玩のために、匆匆の間にそこから秀作を抽出した第二次的選集に過ぎなかった」という結論であった。

そこで、「清水文選學」の本質的な問題をめぐって、『新文選學—『文選』の新研究』を對象として考察してみたい。

(一) 上述した「清水文選學」の「宏觀的」な統計分析法は、第一章「『文選』全體像の概觀」の中に、「一、収録作品の統計による『文選』の全體像把握の必要性。二、全収録作品の統計による分析。三、各王朝の存續年數及び遺存作品數と採録作品との關係。四、収録作品の分野別統計による分析。五、全文體作品の作家別統計による分析：A全文體による分析、B賦の分野による分析、C詩の分野による分析、D文の分野による分析」というきめこまかい統計分析法を駆使して、全體の且つ總合的に實踐されている。その統計分析法によつて、『文選』の外郭は、基本的な點において從來の結論と相當の差異がある」という結論を導き出した。「清水文選學」はここに至つて、新しい研究法が體系的に形成されたように思われる。

ちなみに、この第一章の原作は一九九七年『學林』第二十七號より公表された「全収録作品の統計から見た『文選』の基本的性質」である。

(二) 「宏觀的」な統計分析法を通して概觀された『文選』全體像の上に、さらに「微觀的」考證歸納法を加えることによつて、「清水文選學」の本質的なものがよりいっそう明確になってきた。

「清水文選學」は、一九七六年から一九九九年の間に、『六朝文學論文集』(一九八九年、重慶出版社)として、さらに『清水凱夫「詩品」「文選」論文集』(一九九五年、首都師範大學出版社)として漢譯出版され、中國で「新文選學」をめぐって、學術論争を廣げた。そして、これらを纏めながら、さらに新しい研究法によつて書き直し、遂に完成された「清水文選學」は、『新文選學—『文選』の新研究』(一九九九年、研文出版)という形で公刊され、一つの學問的體系が形成された。

その第二章は「『文選』編纂の實態」という視点から、第三章は「『文選』編纂の目的と選錄基準」という視点から、第四章は「『文選』編纂の目的と選錄基準」という視点から、國際的學術論争を通して、斬新な研究法を駆使して、「文選學」の本質に迫っていた。その結論として、從來の『文選』の撰者「蕭統説」を覆した上で、「劉孝綽主導説」を固めた。これこそ「清水文選學」の核心であり、二十世紀の日本『文選』學研究の最大の收穫と言えよう。

#### おわりに

「新文選學」という學術専門用語の概念としての内包と外延は、國際『文選』學界ではまだ統一していないし、當然ながら、「清水文選學」は完成するまでにはまだ至っていない。清水凱夫氏は、『新文選學—『文選』の新研究』のあとがきで次のように述べている。

この書(『新文選學』)の刊行がきっかけとなり、日中兩國を中心に「文

「選學」論争が(再度)巻き起こり、『文選』研究が世界的な廣がりをもつて一大發展を遂げることを密かに祈念している。

「日中兩國を中心に『文選學』論争」によつて、「新文選學」という學術専門用語の概念としての内包と外延が明確となり、「詞華集としての『文選』全體像の総合的究明」がきつと實現できると筆者は確信している。なぜなら、「清水文選學」がすでにその確實な一步を踏み出したからである。

### 注

- ① 一九六三年に神田喜一郎博士が提唱された「新しい文選學」が、「新文選學」という新しい學術専門用語の源になつていよう(一九六三年日本報刊首次提及『新文選學』一詞、此後研究『文選』編者、『文選』擇錄標準諸問題的文章相繼問世。)、兪紹初・許逸民『文選學研究集成』序、一九九五年十月十二日。清水凱夫氏は、神田喜一郎博士が提唱された「新しい文選學」に應え、「自らひそかに『新文選學』の創建を期した試みであった」と述べている。その成果の一部である『文選』中の梁代作品撰錄についてを第一回「昭明文選國際學術研討會」(一九八八年、中國長春市)で發表された。これによつて、中國で清水凱夫氏を日本の「新文選學」の主要代表と見なすようになった(「與清水凱夫先生論『文選』編者問題」を參照、『齊魯學刊』一九九三年第一期)。それと同時に、「新文選學」というキーワードが次第に國際『文選』學界では新しい學術専門用語となつた。筆者は、第二回「昭明文選國際學術研討會」(一九九二年、中國長春市)で中國の學者と一緒に夜を徹して、清水凱夫氏を圍んで、「新文選學」について論争したが、その光景は未だ腦裏に鮮明に残っている。
- ② 許逸民氏は「再論『選學』研究的新課題」の第二節「加強中外交流、創建『新選學(新文選學)』」で、「我們的確欽佩清水凱夫先生所進行的開拓性研究、在這方面中日兩國學者很有必要加強交流、共同向縱深開掘。」

(『中外學者文選學論集(上・下)』一九九五年、中華書局、四二六頁)と述べている。

③ 屈守元氏が「『新文選學』芻議」(第三回昭明文選國際學術研討會論文集『文選學新論』一九九七年、中州古籍出版社)で清水氏の『六朝文學論文集』に「八難」を發したことからしてみれば、やはりその「旋風」に畏怖を感じていふように思われる。

④ 「與清水凱夫先生論『文選』編者問題」では「清水先生曾多次表示歡迎人們就他的看法『展開論争』並通過論争真正探明『文選』的本質」(『論文集』序言第三頁)。一九九二年八月在長春舉行的『文選學國際學術研討會』上、清水先生在跟筆者交換意見時、也誠摯地表示過同樣的意向。虛懷雅意、俱堪欽仰。草擬本文也可以說是對他的一種呼應罷。」(『齊魯學刊』一九九三年第一期。のち『中外學者文選學論集(上・下)』に轉載、一九九五年、中華書局、四九三頁)

⑤ これについては、拙文「岡村文選學發微」(二〇〇四年河南新鄉で開催された第六回『文選』學國際研討會で發表したもので、のち『第六回『文選』學國際研討會論文集』に收録された)を參照されたい。また、佐竹保子は「日本『文選學』研究」で、『文選』自日本平安時代以來佔有很高的地位、它是日本古典學中最有權威性的書籍之一。它的權威使得日本『文選』學有些停滯的傾向。岡村氏和清水氏の研究可以說是對這個權威的一種挑戰並且使日本『文選』學又動搖又活躍了起來。日本的中國古典學術界期待他們的研究能引起反論和反響、使日本『文選』學第二期能呈現出一片活躍」(『中外學者文選學論著索引』一九九五年、中華書局、一九九頁)と分析している。

⑥ 岡村繁博士『文選の研究』(一九九九年、岩波書店)十頁。

⑦ ⑥と同じ、七十七頁。

⑧ 牧角悦子「日本研究『文選』の歴史與現狀」で、清水凱夫の『文選』研究の學說を「這種斬新而犀利的學說、受到了極高的評價」(『中外學者文選學論著索引』一九九五年、中華書局、二二二頁)と述べている。

(福岡國際大學助教授)